

文の産出に関わる意味情報と照応

Semantic role information and anaphora on sentence production

伊東 朱美
Akemi Ito

東京外国語大学留学生日本語教育センター（非常勤講師）
Tokyo University of Foreign Studies
itoakemi@aol.com

Abstract

This article examines the relation between thematic roles and anaphora. Thematic role information may act as an interface between linguistic knowledge and general knowledge. Thematic roles, such as Agent, Patient, Goal, Source, Experiencer and Theme, relate the arguments of verb to the meaning of that verb. Some experiments concerning pronoun anaphora in Japanese were carried out. The experiments shows that anaphora in Japanese interacts with thematic role information. Sentence continuation tasks were used in which subjects wrote continuations to sentence fragments containing two antecedents, each occupying a different thematic role. Overall, I have evidence that some thematic roles are more likely to be referred to than others. In the sentences which contain Goal and Source roles, Goal role was preferred. Theme role was more highly focused than others in the sentences of Experiencer-Theme sentences and in the Theme-Goal / Source sentences. Between Agent and Patient, neither role was preferred. The results are discussed in terms of thematic hierarchies and the structure of represented events. The difference between the results and Centering Theory is also discussed.

Keywords — Thematic roles, Anaphora, Sentence continuation tasks, Theme, Goal, Source

1. はじめに

本稿では、代名詞などの照応表現を含む文が産出される際、意味役割 (semantic / thematic roles) の情報が指示内容の決定に大きな影響を及ぼすことを明らかにする。現在、代名詞照応に関しては中心化理論 (Centering Theory) による説明が一般的である。それによると、談話中の各発話について「話の中心」が特定され、その「話の中心」の移り変わりによって曖昧な代名詞の先行詞に優先順位を与えることができるのであるが、「話の中心」の特定に幾つかの概念が導入される。その概念こそ照応に関わる本質的な部分であると考えられるが、意味役割という概念を導入しての

詳細な検討は行われていない。従来、代名詞の照応関係に影響を及ぼすと言われているのは、主題性、主語・目的語などの文法的な情報、格や語順の情報などである。本稿の目的は、意味役割という情報が、これらの情報とどのように影響を及ぼし合いながら文を組み立てていくか、日本語の代名詞などの照応表現を含む文の産出過程を探る実験を通して明らかにすることである。

意味役割とは、述語の項が持つ意味上の役割のことである。意味役割は、様々な動詞にわたって、共通の性質を持っていると考えられるものを総合的に示すことができる。たとえば、(1) のそれぞれの動詞は、項として対象物 (Theme)、出発点 (Source)、到達点 (Goal) という共通の三項の意味役割をとる。

- (1) a. りんごが木から地面に落ちた
- b. 太郎が花子に文庫本を渡した
- c. 信号が赤から青に変わった

これらは場の形態が異なっていると考えられる。(1a) は物理的移動に関わる場所的な位置の形態、(1b) は所有の動詞に関わる所有という形態、(1c) はもの自体の状態が変化する同定という形態で叙述されている。対象物の位置付けが異なっていると考えられるのである。(1a) はどこに対象物があるか、(1b) は誰の対象物か、(1c) は何が対象物であるかということについて、出発点と到達点が特定されている。このように、意味役割は、異なった種類の動詞が示す内容について、共通の性質をラベル付けできるのである。

本稿の実験では、焦点が置かれやすい意味役割

の特性を探るため、第一文で述べられる事象 (event) や状態 (state) について、どの部分に焦点が置かれ、第二文が産出されていくかを (2) のような文を提示して調べている。

(2) 春子が夏美に辞書を貸した。彼女は…

被験者は、第一文で述べられる事象の中の「春子」か「夏美」かのどちらかを取り上げて第二文を自由に作り、第二文の文頭にある「彼女」という代名詞が指示する名詞としてどちらの人物を選択したかを答える。「春子」か「夏美」のどちらを「彼女」の指示する名詞として選択したかについて、被験者全体の傾向を調べるのである。この実験によって、表現される事象のどの部分、つまり、どの意味役割に焦点が置かれ、次の文が産出されていくかということを見ることができる。

(2) において、「彼女」がどちらの名詞を指すかということに関しては、まず、主語や意味役割などの言語的な情報に関係なく、文の最初に現れる語の影響が考えられる。知覚のプライマシー効果によると、最初の語を処理するためには後に出現する語よりも多くの認知容量を必要とするということである。(2) では、最初の名詞である「春子」が「彼女」の指示する名詞となるのであろうが、この場合、文法関係として主語あるいはガ格名詞が選ばれたと言うこともできるし、意味役割として出発点であるほうが好まれたとも考えられる。そこで、(2) とは視点が逆になる動詞を含む (3) についても調べることが考えられる。

(3) 冬美が秋子から雑誌を借りた。彼女は…

(3) において、「冬美」が選択されやすいとすると、プライマシー効果が現れているのかもしれないし、文法的な主語性が影響しているのかもしれないことになるが、意味役割は到達点なので、意味役割とは関係ないということになる。「秋子」が選ばれたとすると、意味役割の出発点が好まれると考えられる。この場合、最初の名詞ではない

のでプライマシー効果ではないし、ガ格をとる名詞でもないので文法的な主語性は影響していないことになる。また、(2) では「夏美」、(3) では「冬美」が選択された場合は、意味役割の到達点を選択される傾向があり、(2) において最初の名詞ではなくガ格名詞でもないので、この場合もプライマシー効果や文法的な主語性は影響していないということになる。

日本語は語順が比較的自由であるという特徴がある。そこで、(4) のように語順を入れ替えることもできる。

(4) a. 夏美に春子が辞書を貸した。彼女は…

b. 秋子から冬美が雑誌を借りた。彼女は…

(2), (3) に加えて、(4) について調べることにより、代名詞の照応に最も影響を及ぼしているのがプライマシー効果か、統語的な要素か、あるいは出発点・到達点といった意味役割の情報なのかということが明らかにできる。

2. 先行研究

代名詞の照応に関してはさまざまな実験が行われている。Clark and Sengul (1979) は、代名詞と先行詞の近さ、つまり、時間的接近性が照応関係の理解に影響することを明らかにしている。それによると、先行詞が代名詞に近いほど代名詞を含む文の理解が速い。

知覚のプライマシー効果 (primacy effect) は、Bruner and Minturn (1955) 等において古くから言われており、同じ形態でも異なった文字の後に現れるとそれぞれ異なった文字として知覚されるという。知覚は最初に現れた形に依存するというのがプライマシー効果である。

このプライマシー効果が文や談話の理解にも表れることは、Gernsbacher and Hargreaves (1989) によって明らかにされている。二人の人物が登場する行為を叙述した (5), (6) のような文についてプライマシー効果が見られるという。

- (5) a. Tina beat Lisa in the state tennis match.
 b. Lisa beat Tina in the state tennis match.
- (6) a. Tina was beaten by Lisa in the state tennis match.
 b. Lisa was beaten by Tina in the state tennis match.

被験者はそれぞれの文を理解したあと Tina という名前がその文に現れていたかどうかを問われる。この実験の結果は, Tina が文の最初に現れる(5a), (6a)の方がそれぞれ対応する(5b), (6b)よりも反応時間が速いということである。

代名詞の理解に関する発見的方略 (heuristic strategies) には主語付与 (subject assignment), 並列機能 (parallel function), 並列言及順序 (parallel order of mention) などがある。主語付与は前文で主語となっていたものを代名詞の先行詞とするというものである。並列機能とは代名詞が主語であるか目的語であるかといったことが前文と並列的に機能するというものであり, 並列言及順序とは前文の言及順序と並列的に代名詞が指示する先行詞が選ばれるというものである。Hirst and Brill (1980) は, 筋書きのもっともらしさ (plausibility) が代名詞理解に影響することを実験によって示している。また, 動詞の因果性 (verb causality) が代名詞の解釈に影響するということを Garvey, Caramazza and Yates (1975) が明らかにしている。たとえば (7) の *criticize* という動詞が含まれる文と *apologize* が含まれる文を比較してみよう。

- (7) a. George criticized Walter because he wanted a favor.
 b. Christine apologized to Linda because she wanted a favor.

criticize は動作の原因が動作の受け手にある一方, *apologize* は動作の原因が動作主自身にある。このような動詞に含意される因果の方向にしたがって被験者は (7a) では *Walter* を (7b) では

Christine を代名詞が指示するものとして選択する傾向があることが明らかにされている。並列機能は *criticize* のような動作の受け手が動作の原因であるような動詞の場合には守られないことがわかる。Grober, Beardsley and Caramazza (1978) は, さらに法助動詞を付け加えたり接続詞を変えたりすることによって並列機能が働かなくなる指示転換の効果を検証している。指示転換を強化する効果があるものとして *must* などの「強い」法助動詞や *because* のような因果性を示す接続詞が挙げられている。

Stevenson, Crawley and Kleinman (1994) は, 意味役割が一文を越えたレベルの照応関係の決定に関係しているということを述べている。その実験は二つの先行詞候補を含む文に続く文を被験者に作らせるというものである。次の (8)~(10) のような文が使用され, 被験者はそれぞれの文の後に続く文を作り, 第二文の最初の人称代名詞 *He* が第一文中の下線名詞のどちらを指示するかを答える。

- (8) a. John seized the comic from Bill. He ...
 b. John passed the comic to Bill. He ...
- (9) a. Joseph hit Patrick. He ...
 b. Patrick was hit by Joseph. He ...
- (10) a. Ken admired Geoff. He ...
 b. Ken impressed Geoff. He ...

下線の名詞が持つ意味役割は, (8a) が到達点 (Goal) と出発点 (Source) で, (8b) は出発点と到達点というように順番が入れ替わる。(9) は動作主 (Agent) と被動者 (Patient), (10) は経験者 (Experiencer) と刺激 (Stimulus) である。この実験の結果から, 英語の代名詞が指示する名詞として好まれる意味役割は, 出発点より到達点, 動作主より被動者であることが明らかとなった。これは [初期条件 → 事象 → 事象の結果] という三段階の事象の構造において最後の段階である「事象の結果」が最も強く焦点化されるということであると述べられている。また (10) のような

動作主 (Agent)	「殴る」「蹴る」「食べる」「書く」などの能動的・意志的な行為の主体
被動者 (Patient)	「殴る」のような行為の対象
経験者 (Experiencer)	「好きだ」「憧れる」のような感覚的・心理的な行為の主体
対象物 (Theme)	動作によって移動するあるいは移動される人や物 ある一定の場所を占める人や物 ある経験を生じさせる人や物
出発点 (Source)	出発地、あるものがそこから移動する人や物
到達点 (Goal)	目的地、あるものがそこへ向かって移動する人や物

事象を叙述しない文ではどちらかがより好まれるということはないという結果が示されている。これについては、事象ではなく状態を表す文では結果への焦点化は示せないからだと説明されている。

中心化理論 (Centering Theory) は代名詞照応の研究として現在よく取り上げられる理論である。Walker, Iida and Cote (1994) は、日本語のゼロ代名詞に関して中心化理論による説明を行っている。中心化理論によると、談話中の各発話について「話の中心」が特定されるとき「前向き中心」の対象リストについてランキングが設定されている。その序列は「(文法・ゼロ) 主題>視点>ガ格>ニ格>ヲ格>その他」というものである。この序列は、代名詞出現前の発話に出てきたなかで、先行詞として選ばれやすい項目の順番を示したものであると考えられる。日本語については「ガ格>ニ格>ヲ格」という格の情報が提示されているが、意味役割という概念は導入されていない。

3. 実験

3.1 方法

手順: 継続作文課題 (sentence continuation task) 被験者は、男性名のペアあるいは女性名のペアを含む第一文に続く第二文を自然なつながりになるよう自由に作文し、第二文の文頭にある「彼」または「彼女」が第一文に登場する人物のどちらを指すか○で囲んで示す。

被験者: 日本語を母語とする合計 98 名

提示文: 合計 69 文を提示。同一の被験者に対し同じ意味内容の文を提示しないようにした。

提示した文は、意味役割の組み合わせの違いにより三つのタイプに分けられる。各文の名詞に割り当てられる意味役割は表 1 の一般的な意味役割の定義に従っている。

第一のタイプは出発点と到達点の意味役割をとる文である。実際に提示した文を次に挙げる。

- (11) a. 尚美が幸子から英語の辞書を借りた。彼女は ... (構文 1 [到達点—出発点])
 b. 良男が弘志にパソコンを売った。彼は ... (構文 1 [出発点—到達点])
 c. 幸子から尚美が英語の辞書を借りた。彼女は ... (構文 2 (11a) の語順交替文)
 d. 弘志に良男がパソコンを売った。彼は ... (構文 2 (11b) の語順交替文)

これらは対象物が出発点から到達点へと移動するということを叙述した文である。たとえば (11a) は「英語の辞書」という対象物が「幸子」から「尚美」へと移動する [到達点—出発点] の意味役割とる。(11b) は対象物の動きが逆になる対照的な動詞が用いた文である。また、それぞれの語順を入れ替えて「構文 2」とした。

第二のタイプは、感覚的・心理的な経験を表す文である。意味役割として経験者と対象物をとる。次のように三つの構文を作成した。

- (12) a. 田中は鈴木を尊敬している。彼は ... (構文 1 [経験者—対象物])
 b. 鈴木を田中は尊敬している。彼は ... (構文 2 (語順交替文))
 c. 鈴木は田中に尊敬されている。彼は ... (構文 3 (受身文))

ある経験を生じさせる人や物は、対象物という意味役割と考える。「好きだ」「嫌いだ」や「憧れる」「慕う」などが述語となる。[経験者—対象物] という順序を基本の文として、他に語順を入れ替えた文と受身形にした文を作成した。

述語	構文1	構文2	述語	構文1	構文2
借りる	85	89	貸す	75	56
奪う	80	78	渡す	75	81
買う	95	63	売る	50	30
習う	85	59	教える	70	37
もらう	74	85	あげる	78	52

第三のタイプは能動的・意志的な行為を表す文である。動作主と被動者という意味役割をとる。

- (13) a. 太郎が健次を殴った。彼は ...
(構文1 [動作主-被動者])
- b. 健次を太郎が殴った。彼は ...
(構文2 (語順交替文))
- c. 健次が太郎に殴られた。彼は ...
(構文3 (受身文))

基本的な[動作主-被動者]という語順の能動文を構文1とし、この能動文の語順を入れ替えた文を構文2、能動文を受身の形にしたものを構文3とした。このタイプの動詞はガ格とヲ格をとり、意志的な動作を表している。

また、分類した三つのタイプの文以外に次のような文についても調べた。

- (14) a. 田中が鈴木のところから逃げてきた。
b. 将男のところから周平が走ってきた。
- (15) a. 雅美が貴子のところへ走っていった。
b. 貴子のところへ宏美が歩いていった。

人が移動するという事象を叙述している(14)、(15)について、被験者は上述の方法と同じように「彼」または「彼女」に続く第二文を作り「彼」または「彼女」が下線の人物のどちらを指すかを答えた。(14)は、対象物と出発点、(15)は、対象物と到達点の意味役割をとり、それぞれbのような語順を入れ替えた文についても調べた。これらの文では出発点、到達点に当たる動詞の項が「人物名詞+の+ところ+格助詞」となる。

また、明示的な照応表現が現れる直接照応だけ

述語	構文1	構文2	構文3
好きだ	63	65	81
嫌いだ	67	67	74
尊敬している	85	71	81
懂れている	59	56	—
慕っている	—	—	95

でなく、間接照応の例に関しても調べている。

- (16) a. 太郎は正男の部屋から健次の部屋へ歩いて行った。電灯がこうこうと輝いていた。
b. 太郎は健次の部屋へ正男の部屋から歩いて行った。電灯がこうこうと輝いていた。

(16a)も(16b)も意味役割は、「正男の部屋」が出发点、「健次の部屋」が到達点である。それぞれ第二文の「電灯」がどちらの部屋の電灯であるかという質問をしている。

3.2 結果 I

第一のタイプの文について「到達点」を選択した人の比率を表したものを表2に示す。比率が高いほど出发点より到達点を選択した人の数が多い。

どの構文においても到達点のほうが選択されやすいことがわかる。しかし、動詞ごとに見てみると「売る」は両構文とも「教える」は構文2が例外であることがわかる。

例外的な結果を示した「売る」を除いた述語による違いと構文の違いの影響を二元配置法によって分散分析すると構文の間でも述語の間でも有意ではなかった(構文間: $F=4.87$, 述語間: $F=1.33$)。つまり到達点を選択した人の比率は構文の違いにも述語の違いにも影響を受けないということである。出发点と到達点を意味役割としてとる第一のタイプでは到達点好まれる傾向のあることがわかる。

第二のタイプにおいて各構文の「対象物(者)」を選択した人の比率は表3のようになる。このタイプの述語には受身の形が不自然な言い方になる

述語	構文1	構文2	構文3
殴る	20	67	78
撃つ	35	48	63
殺す	25	37	85
蹴る	50	44	80
呼ぶ	48	50	67
叱る	74	88	93
励ます	89	81	88
誉める	70	87	92
助ける	70	52	78

「懂れている」と受身文のみが自然な「慕われている」が含まれる。不自然な表現となる文については調べていない。また、「好きだ」と「嫌いだ」の語順を入れ替えた文は理解不可能だとする意見もあった。

表3から構文の違いに関わらず意味役割の経験者を選択した人の比率よりも対象物を選択した人の比率のほうが大きいことがわかる。すべての構文のデータがそろっている三つの述語について、構文の違いと述語による違いの影響を二元配置法によって分散分析した結果、有意ではない(構文間: $F=2.69$, 述語間: $F=2.5$) ことがわかった。つまり「対象物」のほうが「経験者」よりも次の文の話題として取り上げられやすいことがわかる。

第三のタイプでは各構文の「被動者」を選んだ人の比率を示すと表4のようになる。「殴る」に関しては能動文では動作主、受身文と語順交替文では被動者を選ぶ人が多く、どちらかの意味役割に偏るという傾向は見られない。しかし「撃つ、殺す、蹴る、呼ぶ」については主語が選ばれやすい傾向がある。さらに「叱る、励ます、誉める、助ける」に関しては意味役割の被動者が動作主よりも選ばれやすいことがわかる。

第三のタイプについても他のタイプと同様に分散分析をすると、構文の間でも述語の間でも有意である(構文間: $F=10.1$, $P<0.01$ /述語間: $F=4.34$, $P<0.01$) という結果であった。つまり「被動者」を選択する人の比率は構文の違いによっても述語の違いによっても影響を受けるという

●田中が鈴木のところから逃げてきた。				
	対象物:	85	出発点:	15
●将男のところから周平が走ってきた。				
	出発点:	15	対象物:	85
●雅美が貴子のところへ走っていった。				
	対象物:	60	到達点:	40
●貴子のところへ宏美が歩いていった。				
	到達点:	26	対象物:	74
太郎は正男の部屋から健次の部屋へ歩いて行った。電灯がこうこうと輝いていた。				
	出発点:	8	到達点:	92
太郎は健次の部屋へ正男の部屋から歩いて行った。電灯がこうこうと輝いていた。				
	到達点:	89	出発点:	11

ことである。また、「叱る、励ます、誉める、助ける」という四つの述語に限ると、構文間でも述語間でも有意ではなかった(構文間: $F=1.95$, 述語間: $F=2.95$)。これら四つの述語に関しては意味役割

の「被動者」のほうが「動作主」よりも選択されやすいと言える。

この四つの述語「叱る、励ます、誉める、助ける」は、心理的な要素がかかわってくる動作であり、第二のタイプにあげた経験者と対象物の意味役割をとる述語と類似していると考えられるだろう。

3.3 結果II

結果Iに示した以外の述語のうち特に出発点・到達点の意味役割をとる文について調べた結果を表5に示す。人が移動する事象を表現している文は対象物と出発点または対象物と到達点を意味役割としてとるが、それぞれの意味役割を選択した人の比率を示している。対象物のほうが出発点や到達点よりも選ばれやすいということがわかる。

また、「人が場所Aから場所Bへ歩いて行った。電灯がこうこうと輝いていた。」はAが出発点、Bが到達点となるが、到達点のほうの電灯であると判断する人の比率が非常に高いことがわかった。

4. 考察

ここでは「対象物>到達点>出発点」という意味役割の序列が代名詞などの照応に深く関わって

いることを述べたい。Nishigauchi (1984) は英語のコントロール現象に関して「到達点>出発点」という意味役割の階層が関わっていることを述べている。英語の例文に対応する日本語の文として次のような文が考えられる。

- (17) a. 太郎が花子にわからないところを調べるために辞書を貸した。
 b. 花子が太郎からわからないところを調べるために辞書を借りた。

「わからないところを調べる」という補文の主語は (17a) でも (17b) でも到達点の「花子」である。語順や格に関係なくコントロールには意味役割の出発点か到達点かということが関わっているということである。これに対して、Ladusaw and Dowty (1988) は目的節が遂行される時対象物の役割を持つ物 ((17) では「辞書」) を所有しているのが到達点の役割の人物であるため結果として目的節の意味上の主語が到達点になると説明する。つまり意味役割の階層が作用しているのではなく人間の行為に関する知識や推論などの言語外の知識が関与していると主張している。

幾つかの意味役割を設定する代わりに「プロト動作主 (proto-agent)」と「プロト被動者 (proto-patient)」という二つのプロト役割を Dowty (1991) は提案している。Stevenson, Crawley and Kleinman の実験から「被動者>動作主」「到達点>出発点」という二種類の意味役割の序列が明らかになっている。この結果から事象が【初期条件 → 事象 → 事象の結果】という三段階で成り立っているという考え方にに基づき事象の構造の中で「事象の結果」部分が最も強く焦点化されると説明されている。Dowty の言うプロト動作主は事象の三段階構造では動作主が動き始める「初期条件」と関連し、プロト被動者はその動作によって被動者が何らかの影響を受ける「事象の結果」と結びつけることができると述べられている。つまりプロト被動者の性格が強い意味役割ほど焦点化されやすいというのである。

本稿の実験から日本語では「到達点>出発点」「対象物>経験者」という意味役割の序列が明らかになったが、「被動者>動作主」に関しては Stevenson らの実験ほど顕著なものではなかった。また、経験者と刺激(対象物)の文は事象を叙述していないので「事象の結果」への焦点化は示せないと説明されているが、日本語の実験では述語の種類や形を一定させていないものの「対象物>経験者」という序列は明白なものであったといえてよい。「被動者>動作主」という序列はどちらかという状態文に近いと思われる文において見られた。

事象の三段階構造というダイナミックな捉え方に基づき焦点化が行われるというよりもむしろ、日本語の場合は事象をも平面的にとらえる傾向があるのではないかと思われる。動的な事象文、静的な事象文、状態文の何れにおいても時間軸を考慮するというよりも全体をひとまとまりとして平面的にとらえ「注目点の移動」に伴い焦点が置かれやすい部分が決定されると考える。「注目点」というのは「くれる・あげる・もらう」などの説明に導入される「視点」とは異なり、対象物の出発点から到達点への流れが基本となる。

「視点」とは久野 (1978) によると話し手が最も共感している人のことであり話し手自身も含まれる。たとえば「眠い。」と言ったとき主観述語の主語 (=経験者) は視点だという原則により話し手自身が主語ということがわかる。この「視点」の概念とは別の「注目点」の移動が照応に関わっていると考える。

動作主と被動者の意味役割をとる文によって表される能動的な行為は、動作主から被動者への動作自体を対象物としてとらえ、それが動作の出発点である動作主から動作の到達点である被動者へと移動するという「注目点の移動」を考える。つまり注目点の移動先である被動者に焦点が置かれやすいことがある。経験者と対象物の意味役割をとる文によって表される感覚的・心理的な行為については経験者から対象物への注目点の移動が関わっていると考えるのである。

ところで、接続詞やモダリティ（言表態度）などが付加されると、後に続く文との照応に影響を与えることは充分予想できる。Stevenson, Crawley and Kleinman によると because は「事象の結果」への焦点化が妨げられるということである。また、モダリティは命題内容に何らかの意味を付加するもので、付加されるモダリティの違いによって伝達される内容も異なってくるのであるから、後続する文との照応にも影響を及ぼすであろう。本稿においてはこのような影響をあえて排除するために実験ではモダリティや接続詞を用いていない。

5. まとめ

考察から代名詞などの照応に関わる焦点化されやすい意味役割を序列化すると次のようになる。

- 対象物＞到達点＞出発点
- 対象物＞経験者
- 被動者＞動作主（他の影響を受けやすい）

本実験から明らかになった焦点化されやすい意味役割の階層は、Stevenson, Crawley and Kleinman の英語に関する実験から得られた結果と比べると、動作主と被動者を意味役割としてとる文において語順の違いによる影響や主語の影響を受ける述語が目立った。また、経験者と対象物をとる述語の状態文においても意味役割の階層が見られた。動作主・被動者の文において被動者が選択されやすい述語は、経験者・対象物をとる述語に意味内容が類似しているとも言える。

冒頭で代名詞やゼロ代名詞の照応については中心化理論を考えるのが一般的であると述べた。その「(文法・ゼロ) 主題＞視点＞ガ格＞ニ格＞ヲ格＞その他」という序列と意味役割の階層を比較してみると、検討の必要性があることがわかる。対象物はヲ格、到達点はニ格で表されるので、「ヲ格＞ニ格」となるべきかもしれない。

事象の三段階構造において最後の段階である「事象の結果」が最も強く焦点化されるという理

解のトップダウン処理は、日本語の場合は当てはまらないのではないかと考えられる。この違いは叙述内容について時間的に移行するダイナミックな一連の事象としてとらえているというよりもむしろ、叙述内容全体を一つのまとまりとして平面的にとらえていることに基づくものとも言える。

ある特定の統語的な過程における意味役割の重要性は多くの言語学者が同意することであるが、意味役割の理論はまだ不十分であると言わざるを得ない。たとえば、意味役割は全部で何個あるかということやそのラベル付けについて一致した意見があるわけではない。しかしながら、本稿では「対象物＞到達点＞出発点」という意味役割の階層を中心に、語順や格、時には主題や視点よりも意味役割の情報が照応に大きな影響を及ぼしているということを述べた。

参考文献

- [1] Bruner, J. S. and A. L. Minturn, (1955) "Perceptual identification and perceptual organization", *Journal of General Psychology*, 53, pp. 21-28.
- [2] Clark, H. H. and C. J. Sengul, (1979) "In search of referents for nouns and pronouns", *Memory and Cognition*, 7, pp. 35-41.
- [3] Dowty, D., (1991) "Thematic proto-roles and argument selection", *Language*, 67:3, pp.547-619.
- [4] Garvey, C., A. Caramazza and J. Yates (1975) "Factors influencing assignment of pronoun antecedents", *Cognition*, 3, 227-243.
- [5] Gernsbacher, M. A. and D. Hargreaves (1989) "Accessing sentence participants: the advantage of first mention", *Journal of Memory and Language*, 27, pp. 699-717.
- [6] 郡司隆男・坂本勉 (1999) "言語学の方法 現代言語学入門 1", 岩波書店
- [7] Hirst, W. and G. A. Brill (1980) "Contextual aspects of pronoun assignment", *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 19, pp.

168-175.

- [8] 伊東朱美 (1998) “意味役割と照応”, 大阪大学言語文化学第7号, pp. 206-215.
- [9] 伊東朱美 (1998) “言語の理解と産出—日本語の照応表現を中心に”, 大阪大学大学院言語文化研究科博士論文
- [10] 伊東朱美 (2007) “日本語の使役空間移動動詞に関する認知心理分析”, 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第33号, pp. 121-128.
- [11] 伊東朱美 (2014) “日本語の移動変化動詞と場所格交替”, 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集第41号, pp. 95-105.
- [12] Jackendoff, R. (1976) “Toward an explanatory semantic representation”, *Linguistic Inquiry* 7, pp.89-150.
- [13] Jackendoff, R. (1983) “Semantics and Cognition”, MIT Press.
- [14] 久野暉 (1978) “談話の文法”, 大修館書店.
- [15] Ladusaw, W. A. and D. R. Dowty (1998) “Toward a nongrammatical account of thematic roles”, *Syntax and Semantics*, 21, pp. 61-73.
- [16] Nishigauchi, T. (1984) “Control and the thematic domain”, *Language*, 60, 215-250.
- [17] 大津由紀雄 (編) (1995) “認知心理学 3 言語”, 東京大学出版会
- [18] Stevenson, R. J., R. A. Crawley and D. Kleinman (1994) “Thematic roles, focus and the representation of events”, *Language and Cognitive Processes*, 9, pp. 519-548.
- [19] Walker, M., M. Iida and S. Cote (1994) “Japanese Discourse and the Process of Centering”, *Computational Linguistics*, 20, pp. 193-232.